

「木原文庫」の展示にむけて

吉永 明弘

江戸川大学社会学部現代社会学科

現在、江戸川大学国立公園研究所では、木原啓吉先生の蔵書や資料(以下、木原文庫)の展示に向けて、分類・整理を進めている。木原先生は江戸川大学の名誉教授であり、環境情報学科(現代社会学科の過去の学科名)の初代学科長でもある。それ以上に、日本にナショナルトラスト運動やアメニティ概念を紹介した人の一人として有名である。

私が木原文庫の整理に携わるようになったきっかけは、2015年8月21日の親泊素子先生(当時、江戸川大学社会学部現代社会学科教授)からのメールであった。親泊先生が、木原先生の一週忌に、木原先生の奥様に、国立公園研究所の一角に木原文庫を作ると提案したという。そのメールには江戸川大学に「ナショナルトラスト論、インタープリテーション論、国立公園論といった、わが国で最初にこの科目をつくった実績」を残すというねらいが記されていた。私はすぐに賛成した。ここで動かなければ貴重な蔵書や資料が散逸するのではないかということと、江戸川大学にゆかりの深い先生の蔵書コレクションが学内にあるのは良いことだという理由からである。

ちょうど1年後の2016年8月14日・15日に、木原先生のご自宅(世田谷)にうかがい、蔵書を拝見した。膨大な数の蔵書の他に、手稿、新聞のスクラップ、録音テープ、ビデオテープがあった。そのなかから、江戸川大学に保管するものを選択した。その過程で、環境問題についての幅広い情報を収集されていたことをあらためて感じた。8月25日に再び木原先生のお宅にうかがい、蔵書や資料を段ボールにつめて宅配便で大学に送った。8月27日のお昼に大量の荷物が配送され、大学の実習棟(K棟)に搬入された。

2017年の吉永の演習実習(2年次)では、木原先生の蔵書を整理することによって、戦後日本の環境問題、環境運動、ナショナルトラスト、アメニティ研究の歩みを探るということをテーマにした。受講した学生6名(渡邊杏美、斎藤肇太、鈴木凱、藤森敏之、原田直都、新岡敏伸)は、蔵書を和書・洋書・雑誌に分類し、それぞれの書誌情報をエクセルに入力してリストを作成した(写真1・2・3・4)。

整理をしているときに、1冊の本が目にとまった。大谷幸夫『空地の思想』(北斗出版)という本である(写真5)。目次を見て内容をばらばらと眺めたところ、これは読むべき本だと思った。1979年刊行で、現在は入手困難だが、ネットから古本で購入してきちんと読んだところ、都市のなかの自然を考えるうえで示唆に富み、また現在でも通用する指摘を数多く行っている名著であることがわかった(復刊されるべき本だ)。当時、環境倫理学に関連する本100冊を紹介する本(『ブックガイド環境倫理』として勁草書房から12月に刊行、写真6)を執筆しており、そのなかの1冊に選んだ(216-217頁に収録)。また、WEB雑誌シノドスに寄稿した論文「都市に「緑地」はなぜ必要か——「市街化調整区域」を真面目に考える」(2017年10月3日、<https://synodos.jp/society/20444>)のなかでも引用した。関心をもたれた方は、拙著や拙論をご覧いただきたい。ここでは、分類・整理の過程で研究上有益な本に巡り合うことができたことを記すにとどめたい。この本だけでなく、研究・教育に役立つ文献や資料が埋もれている可能性がある。分類・整理をきちんとしたうえでリストを公開し、一般に閲覧・貸与ができるようにしたいと思っている。



写真1 木原先生の蔵書（和書）



写真2 木原先生の蔵書（洋書・雑誌）



写真3 蔵書リストを作成した学生たち



写真4 木原先生の遺された資料



写真5 蔵書の中にあった本



写真6 蔵書の一部を紹介